研究評価：性善説から性悪説へ？

井上勲
生命環境科学研究科教授

独法化という大変革と、教員の大学院後期課程専攻への所属変更という二つ変革を同時に迎えて、今後、筑波大学のなかで学系がどのように位置づけられていくのか皆目見えてこない。現時点において想定されている学系の唯一の機能は、教員の評価である。これからその素案を作っていかなければならない立場から、私見を記しておきたい。

会社であれ大学であれ、組織が十分に機能して発展していくためには、組織を構成する個々の人間が最大限に役割を果たさなければならないのは当然だろう。そのために、ほとんどの組織はその構成員を評価している。中古車の販売店でも、成績を表す棒グラフが掲示されて、社員の奮起を促している。コンビニでは店舗ごとの売り上げ金額が日々比較され、強力な競争原理のもとで運営されている。これまで、大学で教員の評価が制度として存在しなかったのは不思議としかいいようがない。教員は年次報告書を提出するので評価は可能だったはずだが、業績が良くても特にほめられることはなく、また多少業績が伸びなくても叱られるわけでもない。これまでの大学は、決して倒産しない個人業者の集団のようなものである。手厚く保護されていた。教育の義務さえ果たしていれば、研究面で不良債権と化しても、取り立てて批判にさらされることはなく、大学教員として存続できた。これまでの大学のしくみでは、仮に、たとえ学会の敗者であっても、学内では普通の教員としてまかり通ってしまうであろう。これまで教員が教育者として、また研究者として期待されている機能を果たすかどうかは、個々の教員の自覚と問題意識によって決定されていたといってよい。壮大な性善説であり、根拠の薄い紳士協定であった。世間から初心といわれても仕方がないだろう。

社会の大部分は性悪説で動いている。小学校から高校まで、子供たちは12年もの間、試験と通信簿による評価にさらされる。なかには落後してしまう子供もいるが、多くは、評価を向上のためのバネとして受け止めているだろう。問題はあるにしても、その結果として成長していく。一般に、教育は、評価によって問題点を指摘することで、向上心を生みだそうとする制度で、酷いまでの性悪説に立脚している。大学教育も然り。評価を厳しくして、やる気と能力を引き出そうとする。英語力を伸ばすために、TOEICやTOEFLの受験を課す動きさえある。義務を課し、評価をしなければ向上しない、という世間で当然のことと受け入れられている原理は、大学生に対しても適用されている。対して、互いの評価をしない仲良しクラブの大学教員が、学類教育をもっと厳しくなどと議論している図は、できの悪いブラックユーモアである。国家公務員として、いったん採用されたら身分が保障されるので、緊張感が薄れる（これは事務職員も同じ）。加えて、筑波大学には講座制が制度として存在しないために、教員の独立性と自由度は極めて高く、他大学に比べると上からの評価にさらされることはなきに等しい。向上心を生み出す原理は、学内ではほとんど働いていないと言ってよい。仲良しクラブから脱却し、向上心と緊張感のある教育と研究の場を確立するために、評価制度は必要悪である。

研究評価の諸問題

教員の評価は、教育と研究、そして学類、大学院、研究基盤の維持や運営に対する貢献など多角的な視点で行われるべきだろう。研究は優れているが、教育には熱意がなければ問題だし、教育にだけ打ち込まれても大学教師としては失格である。研究室や研究組織の運営に無関心でも困る。日本の大学（国立大学）の教員というのはマルチタスクの業種であり、ちゃんとやっていくには、教師と技官と研究者、さらに経営者、管理者としての資質が問われる。分業の思想が希薄で、外国のような技官による研究のサポート制度が貧弱なので、理系の教員の多くは、研究の技術だけでなく、写真の現像からガラス細工、アングルで棚を組み立てることまで、研究に直接関係のない技に習熟している。教育と研究を両立させるには、週5日では時間がとても足りない。だから、多くは週末も出てきて、実験をしたり、学生の論文に手を入れたりしている。こうした教員の評価がどのように行われるべきか、これから議論して行かなくてはならないが、かなり難しい問題を多数含んでいることは確かである。ここでは研究評価に限定して、大学の研究のあり方との関わ

りで述べる。

昨今の業績評価といえば、世間ではインパクトファクター(IF)の高いジャーナルに掲載された論文の数と導入した外部資金の金額と相場が決まっている。それが当然と考える人には議論は不要である。必ずしもそれだけではないという意見が多いから、こうした特集が組まれるのだろう。いわゆる大型予算は、確実な「出口」が求められる応用研究であることが多い。このような研究では、短期間で社会に還元できる、目に見える成果が要求される。最近は、大学も社会も、研究の出口主義に急速に傾斜していっているように見える。しかし、これは本来の大学の姿ではないだろう。大学の原型はリベラルアーツに求められる。実学分野は、社会の要請で後に組み込まれてきたものである。基礎研究を軽視する大学はもはや大学としての体をなさない。大学教員の研究評価にはこの視点が欠かせない。要するに、大学では研究の多様性が保証されていることが最も重要であり、大学の見識が問われるところである。出口ばかり要求される研究は味気ない。

問題は出口のとらえ方である。一部の時流に乗っている分野の研究者を除くと、研究面では、大学の多くの教官は零細な小企業の親父のようなものである。なけなしの予算で、細々と、しかし頑固で着実に研究を前へ進めている。企業からは見向きもされない基礎研究の多くは、拙速な出口を想定しないが、いつか確実に役に立つ成果をあげている。この種の研究の重要性を客観的に評価することは不可能である。外部資金の多寡は研究の流行廃り、需要の大きさを反映していることが多いから、研究本来の価値基準になりにくい。大学教員の研究は、自己目標が提示されて、それがどれだけ達成できたかという点で評価されるべきである。しかし、これを客観的に実施するのは容易でない。研究の価値と達成度を本当に理解しているのは個々の教員だけだからである。したがって、目標の達成度の自己申告が不可欠になる。それを学外に向けて公表することで、それぞれの研究分野の国際的なネットワークのなかで実質的な評価を受けることになるので、申告の客観性は相当程度保証されるだろう。

自己目標と達成度の申告は、複数のスパンで行う必要がある。長い時間をかけないと達成できない研究もある。場合によっては5年、10年かけないと意味のある成果が得られない研究もあるだろう。大学でなければ許されない研究であり、排除するべきでない。こうした研究については、中長期の自己目標とともに、1年ごとの到達目標を設定し、その達成度を評価するなどの工夫が必要になる。大事なことは研究の出口で

はなく、個々の教員が目指している目標を効率よく達成させるための緊張感を生み出すシステム作りである。

一方の、論文の質の評価だが、最近は時代の風潮で、大学院生もIFを気にするようになった。それはそれで励みになるので結構なことだが、一方で、高いインパクトがそう期待できない内容の研究に引け目を感じたり、卑下する傾向があるように思える。IFの高いジャーナルに論文が掲載された学生がそれだけで偉くなった顔をしている例もある。いずれもあまり感心しない。しばらく前、学生の一人が私どもの分野の国際学会の会誌に藻の新種を発表したが、こんなインパクトのない論文を書いていていいのかと疑問を口にした。これに対する私の答えは、現在Natureに掲載されている論文、記事の大部分は100年後にはもはや引用されることはないだろう。君の論文は、100年後でも200年後でも確実に残っている論文だから、自信をもてというものだった。研究の世界にも流行廃りがあり、癌の研究のような生き馬の目を抜く分野での競争では、研究者の母集団が大きいので、論文のインパクトも大きく、引用数も高くなるのは当然である。世界に数十人しか研究者人口がないような基礎研究の分野については、別の物差しが不可欠である。研究の内容の評価と同じで、論文の質についても自己評価と自己申告、そしてそれを公表することで、研究分野に応じた評価が可能になると思われる。小さな研究分野でも、分野ごとに、国際的に認知された複数のジャーナルがある。こうしたジャーナルへの論文の掲載を目指すことは教員に要求されてよい。要は、安易な論文を書くことで満足していないかをチェックすることができて、研究への意欲を生み出す環境が醸成できればよいのである。研究者としての大学教員はまぎれもなく執筆業である。研究の成果は文字として残す義務がある。研究成果を公表し、それぞれの国際的な研究分野から評価を受ける。その評価が教員にフィードバックされる、そんなしくみができればと思っている。性善説から少しだけ性悪説にシフトすることで研究の活性化が図れるなら、評価のない仲良しクラブよりよほどよい。

(いのうえ　いさお／構造生物科学)